九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

村上玄水自筆写本「草稿」について

大島, 明秀
九州大学大学院比較社会文化学府

https://hdl.handle.net/2324/2891

出版情報：中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書. 5, pp.88-90, 2006-03. 中津市歴史民俗資料館
バージョン：
権利関係：

中津市歴史民俗資料館 分館 村上医家史料館資料叢書V

人物と交流 I

ヴォルフガング・ミヒェル編

村上玄水自筆写本「草稿」について

大島明秀

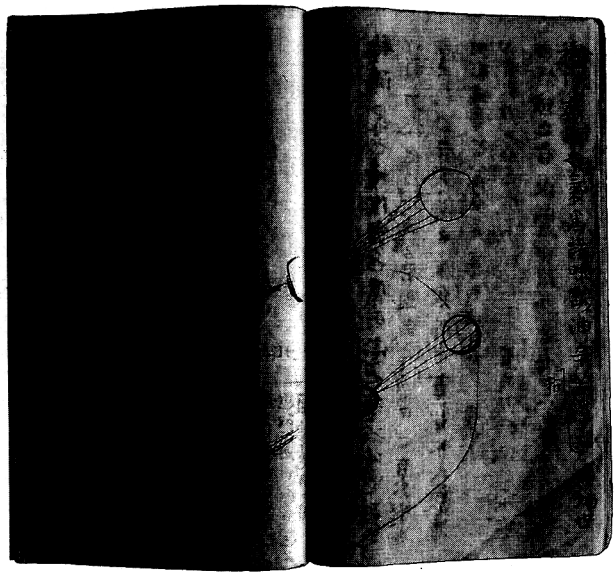
「草稿」[1]については、現在まで四冊刊行されている中津市歴史民俗資料館史料叢書の中で、過去二度にわたって部分的にヴォルフガング・ミヒェルが着目した。その最初は「村上玄水の略歴[2]」で、玄水の事蹟を語る上で、本資料の五丁裏に認められるオランダ語の格言について紹介している。次は「村上医家史料館のランビキについて[3]」において、村上玄水が製造を意図していたであろうランビキ（蘭引）のデザインと、それにまつわると思われる夏至および冬至を描いた図を採り上げた。

このミヒェルの一連の指摘によって、部分的に見ても「草稿」は豊富な内容を含む資料であり、村上玄水の思想を探る上で重要なものであることにもはや疑いの余地はなくなった。そこで本稿では、今後の研究上の活用を考慮して「草稿」の書誌と全体の内容構成を紹介し、本資料の全貌が可視化できるように情報を提供したい。

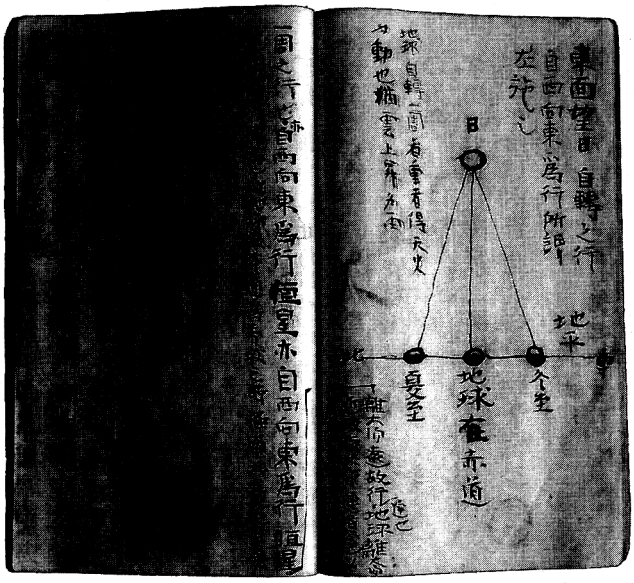
「草稿」は、表紙と裏表紙に用いている部分を除いて四八丁になり（白紙部分も入れる）、大きさは二〇・九×一三・二糎で、紙平紐による四つ目綴じの写本である。著者については、本資料のランビキのデザインを描いた箇所に中に「文政九　六祖玄水製[4]」との記述が認められた[5]。また、写本全体にわたって表記が平たく右払いや右はねに非常に力を込めた村上玄水独特の表記[6]が確認されることから、本資料の全ての部分について、玄水の筆になるものと断定できる。本資料の作成年代についても、上記から文政九（一八二六）年頃だと分かる。

「草稿」の内容構成は次のようなものである。まず、表紙に「草稿」との表題が打ち付けで記され、見返しには「医範提綱[7]」や「解體新書[8]」といった医書の名前が認められる。一丁表～裏は薬名とその製法などが列挙され、二丁表には不明の図が描かれ、二丁裏は白紙となっている。三丁表～四丁裏にかけては、三国志や中国古代の兵法などの話が記載されている。五丁表は再び白紙となる。五丁裏はオランダ語の慣用句が記され、オランダ語の下にはカタカナでその発音が付されている。六丁表～四五丁裏は、主に「夏至」、「冬至」、「氣」や「引力」など天文学的な話題が続く[9]。四六丁表には様々な木の値段が記され、四六丁裏～裏表紙の裏にかけて、何か（ランビキを入れる棚か？）の設計のために、その諸材料の寸法が挙げられている。その中の四八丁表には玄水が製作しようとしていたランビキの図が認められる[10]。

筆者はこれまで玄水による「佛國暦像編」[11]、「老野子」[12]といった天文学関係の写本を調査し、その成果として、釋圓通『佛國暦象編』（初版一八一〇年序）の刊行を起点として繰り広げられた、いわゆる「梵暦運動」に玄水の関心があったことを明らかにし、また、それに対して批判的な姿勢を採っていることなどを指摘してきた[13]。



図一　地球の公転の軌道と冬至および夏至の仕組みを描いた図。「草稿」、二八丁裏～二九丁裏（村上医家史料館蔵）。



図二　右図は太陽の高度と冬至および夏至の仕組みで、左図は地球の公転と冬至および夏至の仕組みを描いた図。「草稿」、二九丁裏～三〇丁裏（村上医家史料館蔵）。

「草稿」には、一七丁裏～一八丁表にかけて「夫大極者之屈居」図が示されている。また、二八丁裏～三〇丁表には地球の公転と夏至および冬至を表した図（図一、図二）が描かれており、三〇丁裏には太陽と地球の「寒帯」、「正帯」、「暖帯」の関係性や、地球の昼夜の仕組みについての図示が見える。この「夫大極者之屈居」図は朱子学的天文学に裏付けられたものであり、一方、太陽と地球の関係性については西洋天文学の知識に基づいている。ここから玄水の天文観が、ただに西洋のみならず漢学による知識と混在した複雑なものであることが分かる。

今後「佛國暦像編」の注釈部分や「老野子」の再考、ならびに「六祖玄水屈伸録」[14]、「天地分體論」[15]といった村上玄水著（と考えられる）天文関係の写本の追究を行う際の資料として、あるいは玄水の思想形成過程の一端を探る資料として、「草稿」は重要な位置付けを占めるものであろう。

1　「村上医家史料館目録」九部一〇七。「村上医家史料館のランビキについて」の脚注二三でミヒェルが提示した書誌は、おそらく「草稿」（「村上医家史料館目録」九部一六六）であり、本資料と情報が錯綜したのではないかと思われる。前掲ヴォルフガング・ミヒェル「村上医家史料館のランビキについて」、七八頁。

2　ヴォルフガング・ミヒェル「村上玄水の略歴」（ヴォルフガング・ミヒェル編『村上玄水資料』I、中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館、二〇〇三年、一～六頁所収）。

3 ヴォルフガング・ミヒェル「村上医家史料館のランビキについて」（W・ミヒェル、遠藤次郎、中村輝子『中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館蔵の薬箱及びランビキについて』〔中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書四〕、福岡、二〇〇五年、六九～七八頁所収）。

4 「草稿」、四八丁表。

5 前掲ヴォルフガング・ミヒェル「村上医家史料館のランビキについて」、七七頁。

6 拙稿「村上医家史料館所蔵写本『老野子』における「有外子」・「老野子」とその背景」（ヴォルフガング・ミヒェル編『村上玄水資料』Ⅲ〔中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書三〕、中津、二〇〇五年）、二三頁。

7 宇田川玄真（榛斎）『医範提綱』、須原屋伊八、江戸、文化二（一八〇五）年序。本書は村上家の蔵書として現存している。「村上医家史料館史料目録」一部三。

8 クルムス（Johann Adam Kulmus）原著、杉田玄白訳、中川淳庵校『解体新書』、須原屋市兵衛、江戸、安永三（一七七四）年刊。本書は村上家の蔵書には確認できない。

9 （ただしこの間の一九丁表には不明な図があり、三四丁表～裏はおそらく玄水が住んでいた周辺の地理の説明で、三五丁表～三八丁表は白紙である）。

10 ランビキの図も前掲ヴォルフガング・ミヒェル「村上医家史料館のランビキについて」、七七頁参照。

11 「村上医家史料館目録」二部三八。

12 「村上医家史料館目録」二部四五。

13 拙稿「佛國暦象編」（ヴォルフガング・ミヒェル編『村上玄水資料』Ⅰ〔中津市歴史民俗資料館分館村上医家史料館資料叢書一〕、中津、二〇〇三年、四〇～一〇四頁所収）、および前掲拙稿「村上医家史料館所蔵写本『老野子』における「有外子」・「老野子」とその背景」参照。

14 「村上医家史料館目録」二部四六。

15 「村上医家史料館目録」二部四七、二部四八。